神戸大学　大学教育推進機構　『大学教育研究』　第 24 号　2016 年 3 月：1-7

授業改善に関する実践的研究
13.　アクティブラーニングと教員（2）[1]

An Action Study on the Improvement of Teaching and Learning in General Education:
13. Active Learning and Teachers (2)

米谷　淳（神戸大学　大学教育推進機構　教授）

要旨

本稿はアクティブラーニングをファシリテートする教員の資質に関する論考の後半である。学生が主体的・能動的に自ら設定したテーマを自らが選んだ方法で自ら立てた計画に従って学習し、それを通して汎用的技能を身につけ、磨き伸ばすだけでなく、自立した学習者として成長していくために、教員が果たすべき役割は何か。その役割を果たすために必要な能力は何か。また、それを身につけ、磨き伸ばすためには何をすべきか。こうした点について学習支援、経験学習理論、インストラクショナル・デザインなどと関連付け、大学の成立や昨今の大学事情を鑑みながら考察した。そして、大学教員は、学習支援、学習相談、グループワーク運営についての指導・助言をするための知識と技能が必要であり、学生時代に AL を経験しておくべきこと、また、大学が自由な議論や学問の場であり、教員はそれを維持する使命があることを自覚し、現代社会が抱える喫緊の課題を意識し、問題意識をもって学生に接する態度が第一と結論した。

4.　AL[2]のファシリテーターはどんな役割か

学習支援は個別指導

Problem-Based Learning であれ Project-Based Learning であれ、あるいはゼミや研究指導において、教員が学生個人または小グループの主体的・能動的な学習を支援しようとするなら、大教室での講義のように教員が受講者に一方的に教科書を説明したり自説を論じたりするだけではうまくいかない。なぜなら、学習支援は学習指導と同様、グループ単位にせよ個人単位にせよ個別指導が前提であるからである。相手の状況もニーズも、悩みも「つまづき」も理解せず、「通り一遍」「十羽一絡げ」の指示・説明をするのは役に立たないどころか有害である恐れが大きい。

---

[1] この論稿は昨年度の紀要論文の後半である。2015 年 8 月 27 日に開催された 2015 年度信州大学 FD カンファレンスにおける筆者の講演「進化する授業づくりのススメ」及び同年 8 月 28 日に同カンファレンスで筆者が担当したワークショップ「グループ de アクティブラーニング型授業 90 分クッキング」を基にしているが、講演録ではない。当該テーマについて、当日使用したスライドと講演原稿を基に、その後読んだ文献や視聴した講演や筆者自身がその後行った講演などを参考に、当該テーマについて新たに考察したものである。なお、副題は改定された執筆要項の字数制限に従い表現のみを修正した。

[2] 本論文の前半同様、この後半でもアクティブラーニングを AL と略す。

教員が学生にする学習支援は医師が患者にする医療行為と同様、個別対応が原則である。医療行為において個別的に患者を診察できなければ正しい診断はできないし、適切な治療は望めない。同様に、教育は人が人を育てる営みであり一対一が基本である。「人を見て法を説け」というように、人を教え育て導くには、まず相手に関心を向け、相手を知り理解しなければならない。それなしにはタイミングよく適切に指導することはできない。

相手の声に耳を傾け、相手の表情・姿勢・しぐさなどをよく観察し、相手がどういう状況に置かれているのか、それを相手がどう受け止め、どのような思いや気持ちかを理解する。それには、耳を澄まして聞き、目を見開いて見るだけでなく、心で聞き、心眼で見ることが大切である。相手である支援すべき学習者、すなわち学生の学習における心理・行動一般[3]についてそれなりに知識をもち、学習支援の技能をある程度磨いておくべきだろう。

学習対象となる専門の分野や領域について指導者にふさわしい学識をもっていることが前提であることは言うまでもないことであるが、自分の知っている知識を伝える技術だけでなく、学習支援に必要な知識・技能がなければ AL をファシリテートすることはできないだろう。それにはまず態度と考え方が正しくなければならない。

教科書一辺倒・知識伝達型授業の終焉

このような教員側の学習支援の基礎・基本の上にこそ AL が成立すると考える。そうした意味で大学教員には、カウンセラーがクライエントにするようなソーシャルサポート[4]と、コンサルタントが顧客にするような役立つ情報の提供と顧客の立場に立った助言を、学生が取り組んでいる学習課題（問題）や学習上の悩みやグループ内のトラブル等について適時行うことが求められる。

大学ではその多くがゼミや研究指導やオフィスアワーにおいて行われてきたが、講義が AL を取り入れたものになるに従い、そうしたシーンが講義中にしばしば見られるようになるだろう。また、日本の大学でも近年「反転学習」[5]が広まってきており、授業中に教員が机間巡視して学生を個別指導するといった、個別学習塾のような風景がますます見られるようになると予想される。

OCW（Open Course Ware）[6]と言われる制度が普及し、インターネットによって大学で教

---

[3] 学習者の心理・行動一般について、例えば、デビッド・コルブの経験学習理論(Kolb 1984)や、ガニェの教授の９事象やケラーの ARCS モデルは参考になる。ガニェやケラーの理論については鈴木（2002）を参照されたい

[4] 困難や悩みを聞いて慰め励まし明るく元気にして問題に自ら対処できるように促す

[5] インターネットを利用して eLearning（講義のストリーミングをオンデマンドで配信するものも含む）で学生に事前学習させ、授業中には受講者全員に問題演習をさせて、教員が机間巡視して個別指導を行う「反転学習（授業）」(Flipped class)　は、米国だけでなく、日本でもいくつもの大学で実践されるようになった。

[6] MIT の OCW は OCW の先駆であり、多くの優れた教材が収められている。http://ocw.mit.edu/index.htm　を参照されたい。

わる多くの科目の教材・演習問題・参考資料がダウンロードできるだけでなく、講義そのもの、それも名物講師の名講義[7]や著名な学者の歴史的講義がオンデマンドで視聴できるようになっている。「教科書棒読み」は論外としても、「黒板とチョーク」だけの一方的な知識伝達型の講義は「淘汰」が進んで少数の良質なものに置き換えられ、大学では通信教育のスクーリングのように、もっぱら学習チェックと個別指導がなされるようになる日もそう遠くないのではないか。良質の講義のストリーミング配信に置き換えられることが可能な科目や置き換えた方がよい科目は遅かれ早かれ教室から姿を消すことだろう。

小グループでの学習の振り返りをファシリテートすること

学生を自立的な学習者に育て上げることも AL の目的の一つと考えるべきである。まっとうな AL を続けるうちに、学生が学習者としての自らの特性と学習の原則や法則を知り、それを自らの学習を効果的で効率的なものとするために役立てることができるはずである。

学習心理学の基本事項や教育工学とくにインストラクショナル・デザインの知識は役立つ。しかし、AL が教員を駆逐するわけではない。Gibbs (1988)が言うように AL を理想的な経験学習にするには学習の振り返りが必要であり、振り返りをする際にはワークショップのようにファシリテーターのもとで学習者同士が集団討議することが望ましい[8]。ファシリテーターとしての教員の役割は AL に駆逐されることはない。

大学教員は今後 AL に駆逐されないためにも、ワークショップ型の振り返りの意義を理解し、振り返りのためのグループセッションをファシリテートできるようになる必要がある。それには自ら AL を通して自立的な学習者となっていることが望ましい。その中でファシリテーターとしての大事な態度や学習についての考え方を身につけていくことができる。講義一辺倒の教育を受けるだけでは AL のファシリテーターとして持つべき態度や学習観は身につかない。教室で AL 型講義を自らが受けることは、これから大学教員となる者には必須であると考える。こうした意味でも、インストラクターの役割が ICT に奪われても、ファシリテーターの役割はそうならないと考える。

5.　教授者に求められるコンピテンシー

大学や企業で教育・訓練に携わる人の能力基準を定めようとする国際的な組織がある。IBSTPI（International Board of Standards for Training, Performance and Instruction）という団体である[9]。IBSTPI は大学教員が身につけておくべきコンピテンシーのリストを定めている

---

[7] 例えば、TED という教育番組がインターネットで視聴できるが、そこでは著名な学者の名講義・名講演が多数収められている。https://www.ted.com/talks?language=ja　を参照されたい。

[8] Graham Gibbs(1988)は David Kolb の経験学習理論に基づく様々な教育実践について言及している中でファシリテータとしての教員の役割とグループによる学習の振り返りの意義が説明されている。詳しくは http://www2.glos.ac.uk/gdn/gibbs/ を参照されたい。

[9] http://ibstpi.org　を参照されたい。

[10]。そのリストにある 18 のコンピテンシーは次の５つのクラスターに分類されている。

[1]　教授者の基礎
[2]　計画と準備
[3]　教授の方法と方略
[4]　評価
[5]　管理

特筆すべきは、「効果的なファシリテーションスキル」がリストに入っていること、そして「教授者としての基礎」の 1 番目、すなわちリストの最初に「効果的にコミュニケーションする（能力）」が挙げられていることである。その他、「学習者のモチベーションと関与（engagement）を高め維持する（能力）」や「効果的に発問できるスキル」も含めれば 18 項目中 4 つがファシリテーションに関するものである。このように、ファシリテーションにかかわる技能はすべての大学教員に必須とされている。

6.　大学教師論の模索

AL をファシリテートできる大学教員になることについて考えてみよう。先に述べたように AL と呼ばれる学習形態の多くは学生の小グループでなされるグループワークである。それゆえグループについての知識、すなわち、集団過程やグループダイナミックスについての基礎知識はもっておいた方がよく、とくにリーダーシップについて正しい考え方をもっておくことは大切である。

大学教員を目指すなら、リーダーとしてグループを率いた経験を積んでおくことが望ましい。教員となってからも、グループやリーダーシップの専門家がインストラクターとなるリーダーシップ研修に参加した方がよいが、少なくとも、リーダーシップについて正しい知識と態度をもち、リーダーシップを発揮するために必要な技能を伸ばし鍛えていく方法を学び、日々の生活の中でそれを実践すべきだろう。

経験学習理論やインストラクショナル・デザインに関して学び、学習と学習支援の基礎基本を学ぶことも役立つ。それらを研究する必要はないが、学問・研究の基本である批判的思考の態度が身についているなら、鵜呑みにせず、まずは疑ってかかり、自分のやれる範囲で検証しようとするはずである。本を読んで理論を学び、理論に基づき現場の実際に合わせた仮説を立て、それを検証する実験をして、データと経験を得、ファシリテーターのもとで学習者同士がそれを付き合わせて討議し、新たな課題（問題）を設定する。こうした経験学習のサイクルを回しながら、学習を進めることにより、当該分野の知識・技能・

[10] http://ibstpi.org/instructor-competencies/　を参照されたい。なお、そこに掲載されているコンピテンシー・リストと解説は Klein, et. al. (2004)に収められている。

態度の習得が進むと同時に徐々に成長して自立した学習者となっていく。こうした経験学習は、学習と成長の過程であると同時に研究の過程でもある。それゆえ、AL ファシリテーターへの道は実践研究の道だと言える。

当然ながら今日の多くの科学研究はビッグプロジェクトであり、異なる領域の科学者が何人も集まり、チームとなって共同研究する。しかも、領域が異なるだけでなく、国や文化の異なる科学者が集まってプロジェクトを推進することも珍しくない。こうした国際共同研究のリーダーとしてチームをまとめ、成功に導くには、プロジェクトをマネッジする能力やリーダーシップ能力だけでなく、異文化・異分野にまたがってのコミュニケーション能力が必要である。こうした能力をどのようにして身につけていけるか。今日、日本の大学では学生にこうしたグローバルな課題にチャレンジする意欲と基礎力を身につけさせることが求められている。教員が率先垂範すべきことは言うまでもない。

7.　エピローグ　～アクティブラーニングが目指すべきもの

大学は研究機関であると同時に教育機関である。大学を学問の殿堂とし、教える側も教わる側も自ら学問することを通して自らを成長させる。これはベルリン大学を創設したフンボルトの構想である[11]。しかし、12 世紀前後にボローニャやパドヴァで大学の原型（ウニフェルシタス）が出来上がった頃は、大学は法学、医学、自然科学などを学びたい学生が互いにお金を出しあって優れた学者を招いて講義をさせる場であった。そして、大学の建物が街じゅうに点在し、街じゅうがガウンを着た学生や学者が往来し議論を戦わせる場となっていたという[12]。したがって AL は、大学が成立した時代から受け継がれたものであり、大学が教員も学生も学問をする場となる前からの伝統であったと言えるだろう。それでは、自由闊達な議論の場としての大学の存在は今でも健在だろうか。

そもそも大学が、国家や宗教などの圧力から保護されながら、教員も学生も自由に探求し、物事を批判的に思考し、それぞれが思い思いの立場から議論し、その成果を自由に発言・発表できる場だからこそ、学問が可能となる。それゆえ、大学自治が尊重され、学問の自由が保障されている。時には学者と学生が時の国家・政府を批判し、それに対立したり、改革・革命を起こそうと運動したりする場ともなり得る。これも大学自治と学問の自由が保障されているからと言えるだろう。

時には国家が大学を弾圧したり、抑圧したりすることもある。日本でも 40 年前には学生運動や大学紛争が社会問題となり、多くの大学がそれに巻き込まれた。その後、学生活動家はあまり目立たなくなり、学生運動も熱が冷め、大学構内での学生による「抗議集会」

---

[11] フンボルトの構想とベルリン大学の成立については、例えば、梅根　(1974) 184 頁～189 頁を参照されたい。

[12] ボローニャで大学の原型が成立した 11 世紀後半の学生と教員の関係や大学と国家との関係については、梅根(1974)11 頁～19 頁を参照されたい。

や「反戦デモ」をほとんど目にしなくなった。

バリケードストライキのために大学で授業ができない時には、筆者も含めて多くの学生がキャンパスで大学問題、政治問題、社会問題について毎日のごとく討議したし、時折授業中に学生活動家が教室に乱入して授業を中止させ、教員に議論を挑んだこともあった。学生は自主的に読書会や学習会を開き、様々なテーマについて学び合い、議論した。こうしたエネルギーはいつの間にか弱まり、学生同士が「天下国家」について各自の考えをアピールすることは、「カッコ悪い」ことになったようである。しかしながら、自由に学問・研究ができ、自由に議論する場を守っていくことは大学教員の使命だと考える。

こうした「自主的に」学び合い議論することが少なくなった経緯を知らないかのように、学生が自主的に学習しなくなったかのごとく言われ、非効率なALが強調され、「教員が話し、学生が聞く」一方通行の授業が、その長所や必然性があるにもかかわらず、AL型授業へと置き換えられようとしている。しかし、講義は学生を授業外学習へ動機づけるためのものであり、そうでなければ学生に聞かせる意味はない。また、たとえAL型の授業であっても、学生自身が積極的に学習に関与し、自らの学習をプロデュースするのでなければ、本当にアクティブな学習がなされているとは言い難い。プログラム化された学習を受動的にするだけならALとは言えないし、自立した学習者に育たない。

批判的思考は何事にも懐疑的で、時には問題自体、前提や枠組みそのものを問い直すラディカルな態度や精神を前提とする。こうした思考や精神を鍛えるものでなければ、ALとは言えないだろう。したがって、大学や教員がお膳立てしたテーマや課題や学び方についても懐疑的な態度、批判的思考の精神をもち、言われたまま与えられるまま課題を淡々とこなすような学生を育てることはALの目的ではないはずである。

コミュニケーション力はスマートにプレゼンしたり、ペラペラ外国語を話したりできることではない。チームワーク力は自分が正しいと思わないことでも表面的にメンバーに同調したり、メンバーを騙したり脅したりして同調させたりする力ではない。相手に自分の意思や気持ちを正しく伝え、相手のことを正しく理解し、人々と道義に基づくまっとうな社会をつくりあげ、それを守っていくための力のはずである。人の道に反することでも「みんなでやれば怖くない」と思えるようになることではない。

政治的なテーマや社会問題だけを扱えと言っているわけではない。が、Problem-Based Learningにせよ、Project-Based Learningにせよ、まっとうなALであれば、現代社会が抱える喫緊の重要課題に関わるテーマに関心が向くようになるのは当然と言えるだろう[13]。何を問題にして、それにどのようにアプローチするか。それが学習者自身にとって意味のある、やる気を起こすものとなっているかどうか。こうしたことを感じとり、理解すること

[13] On-the-Job-Education（OJE）と呼ばれる本格的なProject-Based LearningによりM1を鍛え上げている大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻の卒業生へのインタビューの結果、何らかの形で現代社会が抱える問題と仕事を通して向き合っていこうとする人材が育っていることが確かめられた。

ができる感性と洞察力こそ、AL をコーディネートしファシリテートする教員が第一に備えるべき資質ではなかろうか。

引用・参考文献

梅根悟（1974）『世界教育史体系 26　大学史 I 』講談社

鈴木克明(2002)『教材設計マニュアル　独学を支援するために』北大路書房

Gibbs, G. (1988) *Learning by Doing. A Guide to Teaching and Learning Methods.* http://www2.glos.ac.uk/gdn/gibbs/　（最終アクセス：2016 年 1 月 12 日）

Klein, J. D., Spector, J. M., Grabowski, B., & de la Teja, I. (2004) Instructor Competencies: Standards for Face-to-Face, Online & Blended Settings (Revised 3rd Edition). Information Age Publishing: Greenwich, CT.

Kolb, D. A. (1984) *Experiential Learning -Experience as the Source of Learning and Development.* Prentice-Hall: New Jersey.